

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

カントウタンポポ *Taraxacum platycarpum* Dhalst. subsp. *platycarpum* (キク科 Compositae APG 体系: Asteraceae)

連絡先: 城西大学薬学部
shiratak@josai.ac.jp

ようやく、寒さも和らぎ、野原や道端を歩いていると、タンポポの黄色い花が咲いているのを見かけます。カントウタンポポは、アズマタンポポともよばれ、その名のとおりに、主に関東地方、中部地方東部に分布し、高さ、20～30cm、葉は根際を集まって生え、ロゼット状に広がった倒披針形で深い鋸歯があり、葉や茎を切ると白い乳液が出ます。花は普通、早春から初夏(3～5月)にかけて咲き、ロゼットの中心から伸びた花茎の先に3.5～4cmの1個の黄色い花をつけます。小花はすべて舌状花冠で、その先は浅い5歯となり、多くの在来タンポポ(日本タンポポ)同様、花のつけ根にある総苞の外片(外総苞片^{がいそうほうへん})が反り返りません。また、外総苞片は内総苞片の半分程度の長さで、先に角状突起があり、近縁のシナノタンポポ *T. platycarpum*



写真1 カントウタンポポ (花)



写真2 セイヨウタンポポ (花)



写真3 シロバナタンポポ (花)



写真4 カントウタンポポ (綿毛)



写真5 コウリントンポポ (花)



写真6 カントウタンポポ (全草)



写真7 生薬
 ホコウエイコン (蒲公英根) (左)
 ホコウエイヨウ (蒲公英葉) (右)



写真8 タンポポコーヒー
 (コーヒー) (左)
 (タンポポコーヒー) (右)

subsp. hondoense (北関東～甲信越地方に分布) は、外総苞片が内総苞片の半分より長く幅が広く、角状突起が認められないので区別されます。セイヨウタンポポ *T. officinale* は、ヨーロッパ原産の帰化植物で、外総苞片が反り返り、在来タンポポとの大きな相違点となっています。セイヨウタンポポには有性生殖を行う2倍体と無融合生殖を行う3倍体があり、日本に定着したセイヨウタンポポは3倍体で、単為生殖で種子をつけます。つまり、花粉に関係なく、種子が単独で熟し、そのため繁殖力が強く、分布はほぼ日本全国に広がっています。タンポポの分類は難しく、さらに、近年、在来種やセイヨウタンポポと在来種との雑種も増えていて確かな区別は困難なようです。

一般によく言われるタンポポとは、キク科タンポポ亜科タンポポ属 (*Taraxacum*) 植物の総称で、属名の *Taraxacum* は、ギリシャ語の「苦痛を癒やす」という意味に由来し薬用の意味があります。現在、日本に分布する主なタンポポには、セイヨウタンポポ (都市部、北海道に分布)、カントウタンポポ (関東、東海、北陸に分布)、カンサイタンポポ *T. japonicum* (近畿～北九州に分布)、エゾタンポポ *T. venustum* (北海道～東北に分布)、シロバナタンポポ *T. albidum* (九州～四国に分布) などがあり、和名「タンポポ」の由来は、綿毛を付けた花後の姿が綿球のタンポに似ているので「タンポ穂」とよばれたとする説をはじめ諸説があり、また、古くはフチナ、タナとよばれ、地方によっては、ツツミグサ、フチナなどの呼び名があります。

薬用には、葉をホコウエイヨウ (蒲公英葉)、根をホコウエイコン (蒲公英根)、根を付けた全草をホコウエイ (蒲公英 *Taraxaci Herba*) といい、健胃、解熱、利尿、催乳および胆汁分泌促進作用があるとして蒲公英湯などに配剤されます。なお、中国の「蒲公英」は、モウコタンポポ *T. mongolicum* をさします。ま

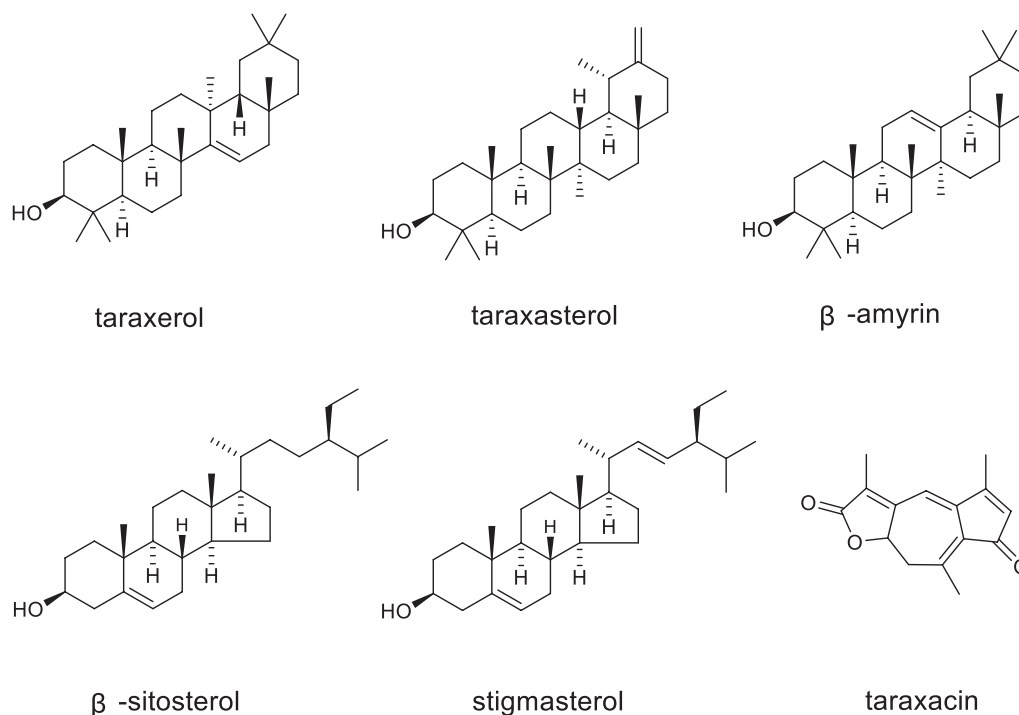


図1 成分の構造式

た、民間療法として、食欲不振、胃の不調のときに、蒲公英を煎じたものが飲まれます。成分として植物種がハッキリしませんが、セイヨウタンポポなどからトリテルペノイドの taraxerol, taraxasterol, β-amyrin, β-sitosterol, stigmasterol, パキスタンに自生する *T. wallichii* からセスキテルペンラクトン（苦味質）の taraxacin が報告されています¹⁾。

セイヨウタンポポは、古くからヨーロッパや中東ではサラダなどにして食用とされ、根を乾燥させて炒ったものはコーヒーの代用品（タンポポコーヒー）として知られ、カフェインを含まないので睡眠の妨げにならず、健胃にも役立つと考えられ、日本でも結構、愛飲されています。

その他、タンポポの名のついた植物には、属は異なりますが、ヨーロッパの高山を原産とし、明治時代、観賞用に導入されたというコウリンタンポポ *Hieracium aurantiacum* があり、今では東北、北海道に野生化しています。

参考文献

1. Viqar Uddin Ahmad *et al.*: Taraxacin, a New Guaianolide from *Taraxacum wallichii*. *Journal of Natural Products* **63**: 1010-1011, 2000.